HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	後期中等教育における高等専修学校の研究 : 高校教育に対する「補完」の実態 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 千春
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 乙第7105号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/79738
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chiharu_Yamada_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（教育学）　　氏　名　　山田　千春

審査担当者　主査　教　授　松本伊智朗
副査　准教授　鳥山まどか　（大学院教育学院）
副査　准教授　光本　滋　（大学院教育学院）
副査　准教授　佐々木　宏　（広島大学）

学位論文題名

後期中等教育における高等専修学校の研究
－高校教育に対する「補完」の実態－

日本において後期中等教育に関する議論の多くは、全日制高等学校を対象としている。一般的にも、中学卒業後の進学先として想起され選択されるのは、全日制高等学校である。こうした「主流」としての全日制高等学校に「非主流」の学校を対置して後期中等教育の多様性について議論される際も、定時制高校、通信制高校といった、全日制高校と同様に学校教育法第 1 条に定められる「学校（1 条校）」を対象とすることが多い。しかし現実には、学校教育法第 124 条に定められる教育施設である高等専修学校のように、「1 条校」以外の学校が中学卒業後の進学先として存在し、後期中等教育の一環を担っている。高等専修学校は「職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図る」ことを目的とし、8 つの職業分野に分類される。修業年限より、1～2 年で資格（准看、理美容、調理など）の取得を目指すものと、3 年制（大学入学資格の付与、他の高校との技能連携制度の活用）のものに大別される。本論文はこの 3 年制の高等専修学校を対象とし、その全体像を把握するとともに、個別の事例の詳細な検討を通して、地域における展開過程と後期中等教育機関としての役割を明らかにすることを試みた研究である。本論文の学術的に評価しうる点は、以下の諸点である。

第 1 に、高等専修学校の全体像について、既存の資料収集と管理職へのインタビュー調査によって詳細に描かれ、整理されていることである。高等専修学校は存在形態が多様である、かつこれを対象とする先行研究は、非常に少ない。しかし例えば、低所得世帯向けの教育費貸付制度等の現場では、高等専修学校を進学先に想定した申請は決して稀な事例ではなく、マイナーな存在として無視しうるものではない。こうした状況下で、本研究では、各種学校時代からの制度的変遷の整理、高等専修学校協会のニュース等の資料分析、技能連携制度の変遷と現状の分析等から、高等専修学校が後期中等教育に位

置づいていく過程の整理と叙述を行っている。そのうえで、北海道内の6つの高等専修学校の管理職に対するインタビュー結果から、地域の教育ニーズ・全日制高校との関係、在籍する生徒の社会層と教育上の課題、学校運営の現状と今後の見通し等が示される。このように、歴史的変遷に重ねて、北海道という地域的限定があるものの、高等専修学校の課題と現状について全体像が整理されていることは、類似の研究が乏しい状況下で、高等専修学校を対象とする今後の研究の前提となる貴重な成果であると評価できる。

第2に、こうした全体像の把握を踏まえて、北海道内のひとつの高等専修学校（B市におけるB校）を事例に、長く校長、理事長を務めた創始者、長期勤続教員、卒業生へのインタビュー調査、学校の記念誌等の発行物を資料として、歴史的変遷と現在の役割について具体的に分析され、描き出されていることである。戦後、「街中の編み物教室」として設立されたB校が、地域の産業構造と教育ニーズの変化の中で、タイピスト養成校、商業学校と役割を変遷させ、技能連携制度の下で「疑似全日制高校」としての性格を持ち、高校教員免許取得者の教員採用の促進などその性格を強め、不登校経験等教育上課題を持つ生徒を受け入れていく過程が、具体的に示される。加えて卒業生の回顧的評価から、B校が「疑似全日制高校」として地域の教育資源としての高等学校を「補完」している現状が分析される。

この作業から、高等専修学校の特質の理解や役割の評価は、地域社会との関係で分析しないとなしえないことが示されている。これは先行研究が考慮してこなかった点であり、大きな学術的貢献といえる。またこの過程は、高等専修学校が、公教育が十分に対応してこなかった各地の後期中等教育段階における教育ニーズを「拾いながら」、それに個別に対応し生き残ってきた過程でもあり、地域における公教育のあり方を問い直す貴重な分析となり得る。

ただし審査の過程では、いくつかの課題が示された。第1に、高等専修学校の積極的意味の検討が不十分であること、第2に、高等専修学校の現状の分析を踏まえた公教育としての後期中等教育のあり方の批判的検討が不十分であること、第3に、経済的、社会的に周辺化されやすい社会層の子弟が多く入学していることが示唆されているが、その点に関する機能や役割について十分に言及されていないこと、等である。こうした課題は、本論文の学術的貢献である地域社会との関係で高等専修学校の意味や役割を分析したことを、より深く発展させることと関わっている。

こうした課題がありながらも、上述の学術的貢献が認められることから、本論文は先行する当該分野の研究の発展に大きく資すると高く評価される。よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。

以上